米国の人種問題：Part Ⅴ：知覚認識された平等と現実

日　吉　和　子

ワシントン・ポスト紙がハーバード大学とカイザー・ファミリー財団と共同して1995年に実施した世論調査結果は最近よく言われている白人とアフリカ系アメリカ人との間の人種要因が関係する事柄に関する意見の相違をはっきりと実証する結果となった。その調査結果によると白人の大多数が多くの黒人達が公共の場で白人と同等の平等を勝ち得ていると答える一方で黒人のほとんどが「人種差別主義と差別待遇が過去10年間で増加の傾向にあると信じている」(1) と言い，68％の黒人（白人の場合は38％）が人種差別主義は現在大きな問題であると答えている。また71％の黒人（白人の場合は36％）が『過去と現在の差別待遇』(2) がいわゆる都市部に住む黒人貧困層が抱える問題の主要な原因であると考えている一方で白人の58％が「黒人家庭の崩壊」(3) を主要原因としている。アフリカ系アメリカ人が一つの人種集団として現在抱える問題は黒人自身に責任があり白人の側には責任は無いと半数以上の白人が感じている一方で黒人の側ではその反対の意見が主流を占めている事が判明した。全般的に見て白人の側は奴隷制度に端を発する人種差別待遇に対する罪悪感や後ろめたさなどの反省の気持ちから離れアファーマティブ・アクションなどを通して罪の償いはそれなりにしてきて平等は達せられているのだから何から何まで白人の責任にしてほしくはない，つまり “Come on. Everything in the world can't be racial”(4) と言う気持ちへと移行しつつあり，黒人の側はまだまだ対等の処遇は受けていないので過去の罪に対する責任を白人に忘れてもらっては困ると感じているのがその数値から感じ取ることができる。この意見の食い違いの傾向はここ数年折りに触れ表面化してきており人種間の溝の深さを米国主流社会の人々にその都度痛感させてきた。

ところでこの世論調査では３万ドルから７万５千ドルの世帯収入があると報告した回答者達を中産階級として分類し別個に調査結果を出しているがそれによると黒人中産階級の65％が人種差別主義が大きな問題であるとしているのに対してそれに同意した白人中産階級は35％であった。さらに黒人中産階級の84％が「過去と現在の差別待遇が黒人が直面している経済的社会的に困難な事柄の主要な原因である」(5) と答えている一方でそれに同意した白人中産階級の人は30％にとどまっている。前者に関してはそれぞれの人種集団全体の数値とそれ程大差は無いが後者に関し

ては白人中産階級は黒人に対してより同情的ではない傾向が感じられ，一方黒人中産階級は黒人の貧困層が抱える問題が黒人社会全体の責任にされる事に対してよりずっと抵抗感を持っているのが明確に現れている。

黒人と白人との間の意見の相違は黒人が白人との平等を勝ち得ていると多くの白人が感じている事に１つの原因があるのは明白である。それに反対の意見が多い黒人の側からすればそれは現実を白人の都合の良い様に解釈しているに過ぎないと言う批判となって返ってくる事になる。状況を考えるとその様な批判も理解できるが，その白人の側の平等感はそれ程ご都合主義の意見であるとして単純に片付けられない点がある。なぜならばそれは１人１人が日常生活を通して知覚認識した実体験を通しての平等感，つまりこの記事の中の言葉を借りれば “perceived parity”[(6)] に基づいた意見であると考えられるからである。その記事を読むとその “perceived parity” は白人と黒人のそれぞれが持つ仕事の質に関する質問に対する調査結果からも見て取れる。それによると白人の46％が黒人は平均して白人が得ている仕事と同質の仕事に就いていると考えており，さらに白人の仕事よりも少しばかり質の高い仕事，またはずっと質が高い仕事を黒人が得ていると回答した白人がそれぞれ白人回答者全体の６％を占めている[(7)]。つまり58％の白人が黒人が得ている仕事は自分達と同じ程度かそれ以上に良い仕事であると考えていることになり，そこから黒人は白人と仕事の面では平等ではないかと言う認識が生まれてくるのである。実際の状況がどの様であろうともこの仕事の質に関する “perceived parity” と言う意見の延長線上に出現するのが65％の白人が社会的経済的状態に関しては白人と黒人との間にはほとんど相違が無いとして連邦政府による低所得の少数民族集団を援助する為のこれ以上の支出に反対していると言う調査結果[(8)] である。この意見が実際に1996年の夏にクリントン大統領により署名され成立した「福祉改革法」に見られる社会福祉を受けている貧困者に対する公的サービスの制限の動きに，また “perceived parity” の意見が差別を是正する目的から出発したアファーマティブ・アクション・プログラムの見直しまたは廃止を要求する州レベルや連邦レベルでのここ数年の動きの中に反映されているのは歴然としている。これらの動きは “perceived parity” が個人のレベルにとどまらずに社会的政治的意見の流れに影響を与え政府の考え方，政策自体をも動かす強力な世論となり得るという点を明らかに実証していると思われる。

この “perceived parity” は実際に自分の目や耳を通して実感した「事実」としてそれぞれが結論づけた意見であると当の本人によって考えられているとすると彼等はそれが主観的，感情的と言うよりも現実を反映させた客観的事実であると信じ込んでいる可能性が考えられる。それ故にそれが事実とは少し違うと他から指摘されても容易に意見を変えはしないであろうし，本来は主観的要素が強いと考えられる意見であるので同じ様な意見を結集させて政治の舞台に乗せようとする動きが一端始まるとより一層強力な感情的推進力を持つと推測されるのである。さらに白人は米国社会の中で多数派を構成しているので米国社会を，米国の政界を説得するのも他の少数民

族集団よりも容易なはずである。そう考えてくると白人の側の抱く“perceived parity”が米国の人種関係の将来にとっていかに重要な意味を持っているかが分かるであろう。そしてこの白人側に有利な動きを牽制しているのが黒人側の抱く“perceived racism and discrimination”と呼べるかもしれないものである。それはチェック・アンド・バランスの機能を果たしていると考えられるが如何せん人数の面で白人の6分の1以下であるので世論結集の面では苦戦を強いられるであろう事は容易に推測できる。従来彼等は「白人社会の過去の罪」と言う強力な切り札を持って圧倒的に不利な人口差をカバーしてきたがその切り札も既に述べた様に黒人側に不利な意見を封じ込める力を失いつつあるとなるとこの主観的要素と人口数を基盤とする白人側の全ての知覚認識を通して形成される意見の動向は黒人社会により，そして両人種間の関係改善を考える人々により今までよりももっと注意深く見守られる必要があるであろう。

ところでこのワシントン・ポスト紙の共同世論調査の目的は要約するとアメリカと言う国とそこに住む人々についてのアメリカ人の現状把握と認識の程度とそれが個々の人々の意見形成に与える影響の程度を探求する事である(9)。そしてその第1回の調査結果報告記事を「白人アメリカ人の大多数が黒人アメリカ人の経済的状況について根本的な思い違いをしている」(10)と言う記述から始め，黒人の経済状況に関する白人の認識が“misconception”でありそれが両人種集団の意見の相違の根底にあると書き進めている。さらに3つの記事からなるこの調査報告の最後に付け加えられたこの調査そのものに関する説明の中で彼等が計画しているのは“to measure the ways that information—and misinformation—shapes how people think”(11)であると述べ，はっきりと“misinformation”と言う言葉をそこで使用しているのである。これらの言葉により直接間接に得た情報が間違っている場合がありそれに基づかれたアメリカ人の現状把握と認識の程度が白人の場合の“perceived parity”の様に間違ったもの，思い違いになりそうであると言う可能性の存在を踏まえてこの調査が行われ，その点を既に事実として確認したことを明確に示していると考えられる。その思い違いに大きな影響を与えるのが既に述べた様にその意見形成の元になる知覚認識の主観的要素であるのは明らかである。

この確認された現状認識の間違いは経済領域だけでにとどまらず米国の全人口の中でそれぞれの人種集団の占める割合に関しても見られる事がこの調査で明らかにされている。この全人口に占める割合についての誤解に関しては「人数に関しての根本的無知」(12)と言う見出しの別の記事にまとめている事からもそれがアメリカ人の人種に関する考え方に重要な関わり合いを持っていると彼等が考えているのが伝わって来る。ところでこの人口に関する数値はその記事の中でも言われている様に住宅地域や職場などの周囲の環境やマスメディア，特に視覚的効果の強いテレビの画面でどのくらいある人種集団の存在が目に付くかと言う事と人種に関して常日頃どの様に感じているかによりそれぞれ異なった程度の誇張が加わり形成される(13)。つまりこの“perceived percentage of the population”とも呼べるかもしれない知覚認識事項が土台となりさらに感情

的な要素が加味されるので実際よりも明らかに違う数値となってしまうのである。全般的に言ってその人口推測数値は白人集団に関しては白人自体も含めてその人口の割合を過少評価しており黒人集団も含めて他の少数民族集団についてはその反対に白人集団だけでなくそれぞれの集団自体も過大評価していると判明した。ここで問題となるのは誤解が最も大きかったのは白人集団で彼等は他の少数民族集団の今以上の人口増加に対する危惧を最も表明しそうである(14)と言う調査結果である。つまり特定の人種集団の見た目に感じられる人口増加に起因する人種的不寛容さが問題となる得ると示唆しているのである。特に白人集団の誤解が他の人種集団よりも大きいと判明している上に彼等は92年の国勢調査で人口の74%を占めている多数派集団であるので彼等が人種的不寛容さを示した場合まさに政府をも動かす世論を生み出す事は他の少数民族集団よりも容易であるのは既に述べた通りである。実際に最近の合法移民の人数や彼等への公的サービスの制限や不法移民の取り締まり強化の要求はその典型的事例と考えられるであろう。

一方その人数に起因する不寛容さの問題は黒人社会にとっては今に始まった事ではないと言えるかもしれない。なぜならば白人と黒人との間には従来より都市問題が論じられる際に必ずと言える程話題に上る "white flight" の問題があるからである。この "white flight" は黒人家族が一組引っ越してくると数年の内にそこは黒人居住区域の様に思える程黒人が増加し治安が悪化し不動産価値が低下すると言う否定的連鎖反応が起こるであろうと言う恐れが基盤にある。ワシントン・ポスト紙の記事は極端な場合は地域住民の人口に占める黒人の割合が3%になっただけでもどっと白人が逃げ始めると言うある研究結果と「白人が逃げ出す事は黒人が近接している事，またはむしろ黒人が近接してくるかもしれない可能性に対する白人の側の並外れた感受性の結果」(15)と言う "American Apartheid" と言う本の説明を載せている。後者によると1970年の段階で白人が95%以上を占める住宅地域が黒人住宅地域から10マイルから25マイル離れた所に位置している場合次の10年間で白人住民を失う可能性は36%であるが5マイル以内に黒人居住地域が迫って来たらその白人住民が逃げ出す可能性は85%まで増加したそうである(16)。これは公民権運動で全米が揺れた60年代直後の1970年に基準が置かれているのでこの様に黒人居住区が白人居住区に近付いてくるだけで逃げ出すと言う超過敏とも言える動きが現れるのは理解できる。しかし現在ではそれがどの程度であるかは定かではないが黒人が同じ住宅地域に，同じアパートに引っ越してくる事に対する抵抗，つまり黒人に "housing discrimination" であると訴えられている行為は依然として続いているのである。

1996年5月18日付けのワシントン・ポスト紙は "A Neighborhood Slams the Door : Racist Acts Greet BLack Family Moving Into White Area"(17)と言う見出しでフィラデルフィア市の白人労働者階級の居住地域で起きた黒人家族の締め出し事件を報じている。それによると2人の娘を持つある黒人女性が引っ越して来たその日に隣人から黒人であると言う理由でそこの住民とは認めないと言われ，その晩にはもう人種差別的シュプレヒコールが窓の外から聞こえてきて，

その翌朝には人種差別的ないたずら書きが窓やドアなどに書かれていたり，ポーチにケチャップがあたかも血の跡であるかの様に撒かれていたりと言う嫌がらせを受けた。その事がマスコミで取り上げられてから市長や支援者の力を得て24時間警官に彼女の家の警備をしてもらったり子供の送り迎えをしてもらったりして事態が治まったかと思った矢先に脅迫状が舞い込み結局は引っ越してから7週間後にほとんどが黒人とヒスパニック系が住む居住地区に移らざるを得なくなったと言う話である。この記事の中である社会学の教授は「貧しい黒人アメリカ人にとって住宅の選択肢は他のどんな集団よりも多分制限されているだろう」(18) と言いその様な状況が貧しい黒人が環境の悪いスラム地域から，そして環境が悪いが故に一層貧困から脱出するのを困難にしていると指摘している。この指摘が正しいのは確かであると考えられるがこの場合この黒人女性が社会福祉を受けている未婚の女性であり家賃補助を受けてその地域に家を借りた上に前の家主との間に家賃を巡ってトラブルがあると言う貧しい黒人と結び付けられがちな要素はこの嫌がらせが始まった後に判明したのであり，市の関係者も人種差別主義がその要因であったと認めている(19) のでここの住民の最初の行動は純粋に黒人が白人居住地域に入って来る事に対する抵抗であったのははっきりしている。彼女が借りた家の直ぐ近くに住む白人の「ここには良い状況がある。犯罪は少ない。ここら辺りでは殺人はまったくない。我々はそんな状態を保っていたいと思っている」(20) と言う発言の中に黒人1人（1家族）イコール黒人人口の増加イコール治安の悪化と言う思考回路がはっきりと見て取れるであろう。これは黒人集団に対する否定的固定観念と結び付いた人数に関する不寛容の例と考えられるであろう。この場合許容人数が0人であり極端な例であることは明白であるがこの様な地域が未だに消滅しないと言う点にこの問題の根の深さを感じ取ることができるであろう。1968年の公民権法により住宅に関する差別分離待遇が禁止され88年に修正条項により罰則が強化されたとは言え個人の心の中に長年存在してきた住宅地に於ける黒人許容人数に関しての意見，言い換えれば知覚認識に基づかれた主観的感情的要素が強い不寛容な態度を30年足らずの年月で変えることは難しく，その種の態度が人種間の関係改善を妨げていると言えるであろう。それでは黒人中産階級により知覚認識されている事について次に考えてみることにしよう。

最近黒人中産階級に属する人達についての本が自叙伝を含めて多数出版されている。そこには社会の中で成功した人の自信と誇りが感じられる。Ellis Cose は彼の本の題名の中で黒人中産階級を総称して “a privileged class” と言う言葉を使用しているがこの名称こそこの階級に属している黒人の思いが込められていると思う。彼等は黒人と言う人種集団の中でも社会的な成功，地位，権力，そして物質的富を手に入れ米国の主流社会の中で暮らす特権を与えられた人であると言う意識を持っているのである。そして彼等はそれなりに処遇される事を望んでいるにもかかわらず，「百万ドルを持っている白人は百万長者であるが百万ドルを持っている黒人は百万ドルを持っている『ニガー（黒んぼ）』である」(21) と言う扱いを受けているのである。どんなに社会的

に成功しても彼等はいつまでも「黒人の」成功した人として扱われその人種区分を示す称号は生涯ついて回ると感じているのである。既に述べた様に人種差別を大きな問題とした黒人中産階級の割合は６５％であると言う統計数値がその知覚されている差別の程度を物語るであろう。ここでは住宅に関しての視点に絞ってそれについて考えてみよう。

Joe Feagin と Melvin Sikes は “Living with Racism/The Black Middle-Class Experience” と言う彼等の本の中で中産階級の黒人達に「アメリカの夢により約束されている物質的な物の１覧表の最初にあるのが好ましく気持ちの良い住宅地域に在るきちんとしたアパートや住宅である……家は成し遂げた業績や社会の中での地位や人格すらをもはっきりと目に見えて指し示す物である。家を所有している人にとってその家とはまた公平さの印であり後に続く世代に受け渡されることができる富の印である」[22] と述べ良い環境の中に家を持つ事が黒人にとっては普通に考えられる以上に象徴的な意味を持つ点を強調している。ある研究によると黒人にとっての理想的な住宅地域は住民の55％が白人で残りの45％が黒人からなる白人が黒人より少し多い人種が入り交じっている地域である。しかし別の世論調査によると白人10人の内４人が住宅に関する差別を禁止する法律よりも黒人に家を売らない権利を白人の住宅所有者に与える法に賛成する[23] 程白人側の抵抗は依然として続いているのである。黒人中産階級が住宅を探している時に受けた差別の話の中でしばしば登場するのが電話で物件について問い合わせている時にその物件が良い地域にあるかどうか尋ねたら「はい，それはとても良い地域です。ここには黒人は誰もいません」[24] と言う答えが帰ってきたと言うものである。それは白人が依然として住宅地域の中の黒人の存在の有無をその地域の善し悪しの基準にしている事を意味している。それ故に全米の大都市の中の上位50都市で行われたある調査では黒人が家を借りようとする時53％の割合で差別待遇を経験し，家を購入しようとする時にはその割合は59％[25] になり黒人の側に於いて住宅に関して差別されていると言う認識が高くなるのは当然の事であろう。

黒人中産階級の人々にインタビューした話の中で電話で物件に関して問い合わせをして直接会う約束をとりつけた後実際にそこに行ってみると黒人であると知った相手に物件を見せるだけでなくそれについて直接話す事すら拒絶され，酷い時にはドアを目の前で閉められてしまったり，またはその物件は既に借り手が付いてしまったと言って体よく断られたりすると言う話がよく聞かれる。これは明らかに不動産物件へのアクセスが黒人であると言うだけで制限される例として考えられるであろう。これと関連しているのが黒人客を主として相手にする不動産屋には白人居住区にある物件情報は流さない傾向である[26]。さらに白人の家主や住宅所有者そして不動産屋により意図的に黒人をある一定の白人居住地域に入れないようにする為に白人の客を案内する所とは別の所に案内すると言う “steering” と呼ばれる行為が行われている。Joe Feagin と Melvin Sikes の本によると驚く事に不動産屋が時には黒人が住み始めた白人居住区に黒人ばかりを連れて行く事により白人が不動産を安く売って逃げ出すように仕向ける違法なブロックバスティング

と言う行為もある[27]そうである。これは人工的に作り出される“white flight”と言えるであろう。黒人が1人でも入ってくると芋蔓式に黒人の住民が増えると言うのはこの様な“steering”が現実に行われているのにも原因があると言えるであろう。白人住民の側がそれに気付いているのかどうかは判断できないがその人口増加の傾向を知覚認識しそれに敏感に反応しそこから彼等が逃げ出して行くと言うプロセスは同じである。そしてその結果として生ずるのが“resegregation”である。つまり黒人居住地域から歴史的に白人の居住地域に引っ越した黒人は白人と黒人が混合した“integrated neighborhood”に住んでいると思っていたらある日自分が黒人居住地域に住み再び人種分離されているのに気付くのである。人種統合された居住地域を求める黒人はまた白人居住区に移り同じプロセスを経験する事になるかもしれない。これは白人と黒人との間の居住地域を巡る「いたちごっこ」である。

Joe Feagin と Melvin Sikes はこの“white flight”の傾向と言う事実に基づかれた人工的な黒人集団の人数調整についてもう一つの動きを挙げている。ある民間経営の大規模団地に申し込んだ黒人会計士が少数民族集団の住民の人数の割合が決まっておりもうその枠（この場合は25%）は一杯であるという理由で断られたと言う例である。これはその団地が連邦住宅補助金を得ていることから人種上の差別待遇ができないが白人住民が不快になってそこから逃げ出さない程度に少数民族集団の人数を制限しておかなければならない事が原因で人数割り当て制度を作りそれを楯に取り黒人住民が増えないようにしていたとして，その行為を“integration maintenance”プログラムまたは“managed housing integration”[28]と彼等は呼んでいる。ここで25%と言う数値が実際にそこに住んでいた少数民族集団の割合であったのかどうか，またその内どのくらい黒人がいたのかどうかについて言及されていないので分からないがその数値が黒人である事以外には全ての条件を満たしている申し込み者を断る際に苦情がでない割合であり，他の人種の住民がいる事に白人が不快感を抱かない限界が4人に1人の割合であると経営者側が判断した結果であるのは明らかである。それが白人住民にとって気にならない数値であったのかどうかはさて置き少なくとも黒人側はこの事を盾に取って申し込みを断られて不満を持った事はその団地側の行為が新聞沙汰となり司法省がその経営者側を裁判に訴える結果となった成り行きを見ても分かるであろう。黒人側はこの数値が妥当であると感じるかどうかよりも人数割り当て制度自体の存在を差別として問題視していた事は明白である。以前よりも高い経済的社会的地位を得ている黒人中産階級と呼ばれる人達は白人居住地域の中に住める財力を持ち，しかも黒人集団の3分の1を占めるまでに成長するに伴い白人居住地域にある住宅への需要が増加しているので以前の様に彼等の人種集団が住める機会が持てるだけでは個々の需要を満足させる事ができず白人と同じ様に自分自身が住みたい所に住める事への要求が出て表面化して来るのである。この様に黒人中産階級の間では差別に対する査定の基準が高くなって行くのは当然の成り行きである。この傾向を無視するとこの場合の様に訴訟沙汰になる可能性は益々増加することになるであろう。

ところでこの "managed integration" は住宅に於ける差別の一因ではあるが同時に住宅地域の "resegregation" を阻止する役割も持っていると Joe Feagin と Melvin Sikes は述べている。しかし彼等の説明によるとこの場合には白人が逃げ出さないように白人に優遇住宅ローンや白人の不動産価値を保護する保険を得られるように手助けしたり，買い手となりそうな有望な白人の客をその地域に連れてくるように不動産屋に奨励したりする方法で行われる為黒人は別の意味で差別を受ける事になるのである[29]。この様な差別なくして白人と黒人が共存する住宅地域を持つ為には少なくとも白人に逃げ出したいと思わせている黒人に対する否定的認識を是正できる様に双方が互いに歩み寄る姿勢が必要であろう。しかし黒人が白人居住区に引っ越すと睨み付けられたり，行動を絶えず監視されたり，差別的言葉を浴びせられたりと言う温和なものから十字架を家の前で燃やされたり，自宅の一部を壊されたり，最悪の場合は身体的に危害を加えられたりと言う過激なものまで様々な嫌がらせを受けた場合黒人は白人の側に積極的に歩み寄ろうとする気にはなれないであろう。そして両人種の大人達の日常生活に於ける人種を区別したり差別したりする言動や雰囲気や見解はそれに絶えず晒されている双方の子供達によっても知覚認識され，それによりその子供達もそれぞれ知らず知らずの内にお互いの人種を区別し，相手の人種集団に対して親達とほぼ同じ感覚的意見を持ち行動する傾向を示すようになるのは当然の成り行きである。これはよく指摘される様に差別・区別意識の親から子への継承である。1992年に15才から25才を対象にして行われたある世論調査によると白人の53%（黒人の62%）が白人のほとんどが黒人を相手にしていると気が落ち着かないと考えており，白人の54%（黒人の52%）は黒人は一般的に白人と一緒にいると居心地が悪いと考えていることが判明し人種の区別が既にこれらの若者の間に根付いていると結論付けられている。また白人の81%がマイノリティ集団が米国内で依然として多くの差別に直面していると認めているがアファーマティブ・アクションによる優遇措置に関して48%が黒人は余りにも多くの優遇を受け過ぎていると言い，47%は黒人は公正に処遇されていると答えて黒人が差別の犠牲者であると見なしたのはたったの４%に過ぎなかった。そして55%の白人が黒人自身の問題の多くは黒人の責任でありそれを黒人は差別のせいにしていると考えていた[30]。これらの白人の若者達は差別の存在をはっきりと認めている点を除いては白人集団全体の意見の傾向をはっきりと示していた。この様に子供達の意識の中に区別意識や偏見が染み込んでしまう前に交流を持ちお互いに直接接触することで理解を深める為にも居住地域での，日常生活のレベルでの共存化の必要性が一層重要に思われてくるのである。

オハイオ州立大学法科大学の学部長の Gregory Howard Williams の自叙伝はその人種差別の基盤にある人種意識に関して興味深い事実を伝えている。"LIFE ON THE COLOR LINE" と言う題名のその本はある日突然自分の母は白人であるが父は白人ではなく黒人であり彼自身も黒人に属すると知った少年が父の故郷の黒人スラム地域に移り住み外見だけでなく考え方も白人であった彼が外見は当然白人のままでありながら次第に黒人へと精神的に変化して行く様子を語っ

ている。彼が初めて自分は黒人であると知ったのは商売も旨く行かず母親が家出した上に貧困のどん底にいた父と弟と共に故郷に戻るバスの中であった。それは54年１月のことで当時10才の彼は昔父の酒場を手伝いに来ていた黒人女性が実は父の本当の母親であり彼と弟にとっては祖母であると告げられた。彼は自分が白人であると確信していたので即座に “But that can't be, Dad! She's colored.”(31) と答えたが父親はさらに “That's right,Billy.She's colored. That means you part colored, too.”(32) とはっきりと彼等は黒人であると宣言した。さらに父は「人生はこれからこれまでとは違ったものになるだろうよ。バージニア州ではおまえ達は白人の少年だった。インディアナ州では黒人の少年になるんだ。おまえ達は昨日のおまえ達と今日のおまえ達は同じだと言う事を覚えておいてほしい。でもインディアナ州にいる人達はおまえ達を今までとは違う風に扱うだろう」(33) と黒人として生活する覚悟を決めるようにと促した。弟のマイクは「黒人になりたくない。泳ぎに行ったりスケートに行ったりできないよ」(34) と言い黒人が白人とは異なって処遇される事を理由に黒人であると言う事実を否定したがった。兄の場合も同様で「僕は黒人ではない。白人だ。僕は白人に見える。いつも白人だった。『白人だけの』学校に行き，『白人だけの』映画館に行き，『白人だけの』プールに行っている」(35) と人種分離待遇を白人の側から体験して来た事実から黒人であることを信じるのを飽くまでも拒否しながらもこれまで白人として暮らしてきた10年間で黒人である事が米国社会の中で何を意味するかを子供心にしっかりと考えていた。そして別の場所ではまた白人になれるが父の故郷には K. K. K. が一杯いるので黒人であると知られたら黒人のいるべき場所に納まっているように有らん限りの事をされるだろうと言われたグレゴリーはそれがどの様な状況を意味するかは理解していなかった。ただ K. K. K. と聞いて恐怖にかられただけであった。この段階で既に２人とも黒人に対する白人としての区別意識を身に着けてしまっていて白人の視点から物事を見ていた事は彼等の反応からも明らかである。そしてグレゴリーが既にテレビの西部劇を通して黒人からも白人からも嫌われると知っていた白人と黒人との間にできた “half-breed” として弟と一緒に無理やり押し込められた格好で生活し始めた黒人世界に溶け込み，黒人のいるべき場所に納まっている事の意味を実感し，黒人としての自分のアイデンティティーを最終的に受け入れるまでに10年掛かっている。白人としての10年を消し去るのに黒人としての10年間が必要であったことになる。人種意識はまさにこの様に環境により植え付けられ，しかも途中変更も可能と言う事になる。そして彼の場合白人社会が彼の存在を拒否した事でこの途中変更を余儀無くされたと言えるであろう。

まず彼は人種統合されている小学校で最初に友達となったのが白人であるが２週間目に彼が黒人であると知って口を利いてもくれなくなり黒人生徒達と付き合うしかなくなってしまう。次に教師の側も彼が黒人であると知ると態度を一変させて差別的言動を示し，彼が高校の最終学年の時たまたま盗み見る機会があった彼の身上記録書類の中に「子供の生活の中で価値があり重要な事実だけを記録する為」(36) のカウンセリング用の欄の最初に父が黒人で母が白人で離婚しており

外見上は彼と弟が白人の様に見えると書かれてあるのを発見した。彼は学校で得たカウンセリングは白人の女の子とデートしないようにと言うものでこの記録の目的は彼自身と彼の「外見に教師たちがだまされないように手段を講じる為」[37] だけであると言っている。一方彼が教育の現場でも白人の為だけの物事や場所があると痛感したのは6年生の卒業式の時であった。事前に最優秀生徒として表彰されるであろうと担任教師から伝えられ，新しい服も買ってもらいアル中の父ですらもしらふで出席した卒業式で聞いたのは白人の名前であった。この様にして彼は周囲の白人社会から冷たく突き放され社会の中における黒人の適所と言動を教育されたのである。

一方白人の母親の実家は貧困の中で暮らす彼等を援助することもせず，同じ町の中で1マイルしか離れていない所に住み彼等の居場所を当然知っていながらも母親も含めて祖父母達は会いに来てもくれなかった。そして1年半後に会いに来た祖母の態度は冷たく弟が母の住所を知りたがっている事を母に伝えてくれと頼んだ時祖母の口から出た言葉は “Don’t tell me what to do ! I don’t carry messages for niggers”[38] であった。血の繋がった孫に向かって実の祖母が “nigger” と言う差別用語を発した衝撃は計り知れなかったであろう。それは血の繋がりよりも人種要因が優先されることであり彼等を孫として受け入れ無いと言う完全拒否の最後通達に等しかった。彼は「白人から完全に受け継いだ物を否定する事は白人の家族に対する怒りと偏見のせいというよりもむしろ彼等による彼等（黒人と白人の間にできた子供達）の存在の完全な絶対的な拒絶のせいであった」[39] と白人社会による，少なくとも身内と呼べる人々による受入れ拒否により彼等は否応なく白人社会との交流の道を閉ざされてしまった状況を述べている。それにより黒人社会の中で黒人として生きて行くしかなくなってしまった彼等は大雨の中外の「黒人専用」の待合室へと追い出されたりバスで前の座席に座れなかったりした体験，立派な運動施設を持つ白人用 YMCA とみすぼらしい黒人用 YMCA の存在，修士の学位を持ちながらも最初白人家庭の掃除婦をしなければならなかった人やハーワード大学に初めて進学したその町の黒人の一人として黒人の誇りであり将来を嘱望され本人も弁護士になろうとした夢が破れた父や，やはりその町から軍隊に入った初めての黒人の一人で軍人になろうとしたが農業をやることになってしまった叔父などを通して黒人の側からの厳しい差別の世界の現実を身に染みて覚えて行くことになったのである。次第に彼は白人として間違われると自分は黒人であると抗議するまでになっていった。社会の中で成功する為には「白人」でなければならないと他の黒人達と同じ様に考えていた父親はグレゴリーの優秀さと真面目さと将来の有望さを認め彼は白人であると言った時も，さらに他の黒人達に「グレッグは白人だとは思ってないんだ ..... たとえ彼が黒人になりたいと思っても彼は黒人じゃないんだと言ってくれ」[40] と頼み彼等が父の考えに同意した時も白人になりたいとは思わないと公然と答えていた。彼は父親が社会的に失敗したのは白人と偽って生活しようとした事にあると確信していたので父が息子に対して白人として生きるようにと言う心が理解できなかったが実際に黒人になりたいとその時点で思っていたわけでもなく自分を「完全に拒絶した白人社会

の一員になるには余りにも多くの事」[41]が起こり過ぎていたからであるとその当時の心境を述べている。そして彼は黒人の血はたった32分の5しか混じっておらず青い目とブロンドの髪と白い肌の白人として完全に通用する人物が黒人としてNAACPの指導的地位に就き偏見と差別に反対して国内を遊説し全国の黒人地域社会が彼を大歓迎した話を父から聞いていたので黒人社会にとどまっていても成功する事ができると知っていた上に自分が誰であり何になりたいかが分かっていたので黒人として生活する事をもう12才にして決めていたと書いている。その黒人として生きる事を彼に最終的に選択させた出来事は10年ぶりの母親との再会であった。白人と再婚していた母が一緒に暮らそうと誘った時彼は「彼女に受け入れられるには我々の黒人として受け継いできたものを否定し，マンシーの人々とそこでの我々の生活の状況が存在しなかった振りをする事が必要になるであろう。我々は『黒人の』子供であった事を忘れるべきであった。彼女は我々に過去も持たずに，ルーツも持たずに，我々の貧窮が最も大きかった時に我々を保護し面倒を見てくれた人々に対する思いも無しに彼女の生活の中に戻る事を期待している」[42]と冷静に分析し，結局母親の家族と共に白人として再び暮らす事を断ってしまうのである。

この自叙伝を読むと白人と黒人と言う人種の区別とは外見上の皮膚の色だけで決定されるのではないことがはっきりと分かるであろう。そして一端どちらかに区分されてしまいその区分を知っている地域社会の中で生活する場合はそれに従って処遇され自分の意思にかかわらず特定の人種意識が植え込まれてしまうのである。この筆者が育った時代がまだ人種分離差別が公然と行われていた時代であった事にも原因があるかもしれないが実際に白人社会の中で白人として生活してきた過去を否定され白人社会から完全に拒絶されると言う体験は彼に白人社会に対する否定的感情を生涯持たせる事になったであろうし，白人の母親に対して感じたのと同じ様に白人社会との間に精神的な距離感を感じさせる事にもなったであろう。これ程強烈な体験でないとしてもそれとなく余り露骨でないやり方で（たとえば既に家の借り手が見付かったと言われたり，レストランで席に案内されたり注文を聞かれたりするのに白人よりも時間がかかるなど）現在も様々な領域で黒人達は白人社会の中に入る事，彼等の一員になる事を拒否されていると感じさせられているのは確かである。それ故にO. J. シンプソン事件の裁判や無罪評決を巡って国中が黒人と白人に2分割されてしまう様な状況，つまり黒人社会と白人社会は別々の国の様に完全に別れてしまっていると評される状況がいつの間にか出現してしまっていたのである。その状況改善の為の第1歩は「白人は人種差別主義の社会の中で育ってきたのでたとえ彼等が否定してもその人種差別主義の隠れた影響を心に抱いている事を認めるまでは，そして白人も個人的な，または社会の人種差別主義に対処する為に行動を取らなければならないと認めるまでは」[43]始まらないとJoe FeaginとMelvin Sikesは述べている。圧倒的に白人が多い地域に住む黒人中産階級の子供達は比較的人種差別に遭遇しないで成長できるが彼等がその小さな世界，「小さな繭」[44]の様な世界からより大きな社会へと出て行くと途端に人種の区分や差別に遭遇しなければならない現実を前

にして親達は人種偏見や差別について子供達をいかにして準備させるかの問題を抱えているとEllis Coseは伝えているがこの様な小さな個々のレベルで進行中の差別意識の少ない世界で育った子供達にその様な準備をさせなくても良い社会にする為には白人側の "perceived parity" を含む知覚認識に基づく意見の見直しと黒人を仲間の一員として受け入れようとする精神的方向転換を必要とするであろう。

注

(1) 引用："Across the Racial Divide," *The Washington Post National Weekly Edition,* Washington, D. C., The Washington Post Inc., October 16-22, 1995, p. 6（筆者翻訳）
(2) 引用及び統計数値参照：同上。
(3) 引用及び統計数値参照：同上，p. 7.
(4) 引用及び統計数値参照：同上，p. 6.
(5) 引用及び統計数値参照：同上，p. 8.（筆者翻訳）
(6) 引用：同上，p. 6.
(7) 統計数値参照：同上。
(8) 統計数値参照：同上，p. 7.
(9) 参照：同上，p. 6.
(10) 引用：同上。（筆者翻訳）
(11) 引用：同上，p. 10.
(12) 引用：同上，p. 7.
(13) 参照：同上，p. 7～8.
(14) 参照：同上，p. 6. 具体的な統計数値参照：同上，p. 7.
(15) 引用：同上，p. 8.（筆者翻訳）
(16) 参照：同上。
(17) 引用："A Neighborhood Slams the Door/Racist Acts Greet Black Family Moving Into White Area," *The Washington Post,* Washington D. C., The Washington Post Inc., Saturday, May 18, 1996, A1.
(18) 引用：同上，A 1 & A12.（筆者翻訳）
(19) 参照：同上。
(20) 引用：同上，A12.（筆者翻訳）
(21) 引用：*THE RAGE OF A PRIVILEGED CLASS,* Ellis Cose, HarperPerennial, New York, 1993, p. 28.（筆者翻訳）
(22) 引用：*LIVING WITH RACISM,* Joe R. Feagin & Melvin P. Sikes, Beacon Press, Boston, 1994 ,p. 223 .（筆者翻訳）
(23) 参照：同上，p. 227.
(24) 引用：*THE RAGE OF A PRIVILEGED CLASS,* p. 42.（筆者翻訳）
(25) 統計数値参照：同上，p. 40.
(26) 参照：*LIVING WITH RACISM,* pp. 227～228.
(27) 参照：同上，pp. 243～244.

(28)　引用：同上，p. 232.
(29)　参照：同上，p. 248.
(30)　統計数値参照：*THE RAGE OF A PRIVILEGED CLASS,* pp. 142～143.
(31)　引用：*LIFE ON THE COLOR LINE,* Gregory Howard Williams, Dutton, New York, 1995, p. 32.
(32)　引用：同上。
(33)　引用：同上，p. 33.（筆者翻訳）
(34)　引用：同上。（筆者翻訳）
(35)　引用：同上，pp. 33～34.（筆者翻訳）
(36)　引用：同上，p. 256.（筆者翻訳）
(37)　引用：同上，p. 257.（筆者翻訳）
(38)　引用：同上，p. 113.
(39)　引用：同上，p. 123.（筆者翻訳）（文中の括弧内は筆者による注である）
(40)　引用：同上，p. 157.（筆者翻訳）
(41)　引用：同上。（筆者翻訳）
(42)　引用：同上，p. 281.（筆者翻訳）
(43)　引用：*LIVING WITH RACISM,* p. 321.（筆者翻訳）
(44)　引用：*THE RAGE OF A PRIVILEGED CLASS,* p. 140.（筆者翻訳）

参考文献

"Across the Racial Divide," *The Washington Post National Weekly Edition,* Washington, D. C., The Washington Post Inc., October 16-22 , 1995 ,pp. 6-10 .

"A Neighborhood Slams the Door/Racist Acts Greet Black Family Moving Into White Area," *The Washington Post,* Washington D. C., The Washington Post Inc., Saturday, May 18, 1996, A1 & A12.

LIFE ON THE COLOR LINE, Gregory Howard Williams, Dutton, New York, 1995.

LIVING WITH RACISM, Joe R. Feagin & Melvin P. Sikes, Beacon Press, Boston, 1994

THE RAGE OF A PRIVILEGED CLASS, Ellis Cose, HarperPerennial, New York, 1993.